Meisei University

赤い糸の伝説

古田島洋介

日本における赤い糸

赤い糸の伝説と言えば、今日の日本において、少なくとも若い世代にあっては、男女が結ばれる運命を象徴する具象的イメージとして、なかなかなじみの深い話柄であろう。少女向け雑誌やいわゆる適齢期の女性を対象とした婦人雑誌、あるいは青少年向け雑誌においても時おり特集記事が編まれ、恋愛・結婚にかかわる占いを兼ねた一種の暇つぶしの読み物として愛好されているようである。例えば、曰く「気になる彼と、あなたは、どんな糸で結ばれてる!? 幸福の赤い糸占い」[1]「愛を拒否する男と恋を信じられなくなった女。男と女を結びつける赤い糸が危ない！」[2]「激増する女の子のNEO恋愛願望『赤い糸』症候群をチェック」[3]「神様がくれた恋 神様が結んだ赤い糸」[4]「この夏の恋のきっかけが見えてくる 彼との赤い糸が！ 運命の前世占い」[5]等々。

また、漫画にも、まさに『赤い糸の伝説』という題の作品があり[6]、赤い糸の伝説は盛んに登場しているようだ。ここ数年の間に流行してきた評判芳しからぬテレフォンクラブ、すなわち巷間に謂う所のテレクラなる業種にも「赤い糸」と銘打つグループ名があるところを見ると、なかなかの流行であると言ってよいだろう。

もっとも、いささか年輩の世代に属する女性にうかがってみたところ、この伝説を耳にするようになったのは最近のことで、具体的にはテレビで流される結婚式場のコマーシャルでなじんでいるのが実情であるという。確かに、将来の結婚相手とはすでに生まれた時から結ばれる運命になっている、何かしら不可思議な力で互いに引き寄せられるという話を娘時代に母親から聞かされたことがある。けれども、それを色まで明確に指定して赤い糸だとすることはなかった云々。数多くの女性に聞き回ったわけでもないので、さして確かとも言えぬが、どうやら男女を結ぶ赤い糸の伝説が若い世代を中心として一般化したのは、それほど遠くもない事のようである。

なるほど、歌謡曲を例に取っても、その昔、森山良子は『禁じられた恋』で「禁じられても会いたいの、見えない糸に引かれるの」と歌っていただけであるが、近時の瀬川瑛子は『命くれない』で「生まれる前から結ばれていた、そんな気がする紅の糸」と歌っている。もっとも、最近では、赤い糸を男女間のみならず、さらに広い意味で用いる場合もあるようで、例えば、女子プロレスラーのキューティー鈴木と尾崎魔弓の同性愛まがいの写真集が『赤い糸』の題名で発行された[7]り、去年（一九九二）以来、世間を騒がせている佐川急便事件を扱った文章に「金丸、渡辺（広）、石井を結んだ〝赤い糸〟を手操る[8]」な

NII-Electronic Library Service

Meisei University

どという題が付されたりもしている。

ただし、赤い糸がどこに結ばれているかとなると、足という説と手の小指という説とが並行しており、先に掲げた例で言えば、漫画『赤い糸の伝説』などは足、テレビのコマーシャルなどは手の小指だとしている。女子大生あたりに聞いてみた話では、後者すなわち手の小指が通り相場であるらしいが。

しかし、一般雑誌だの漫画だの歌謡曲だのと、あまりに卑俗な例ばかりでは困ると言う向きもあるだろう。その種の声に対しては、少しく年代をさかのぼって、次の二つの例を示しておくことにする。

まずは柳田国男である。講演「旅行と歴史」（一九二四年六月二三日、原題「歴史は何の為に学ぶ」）に左記のような字句が見える。

> 国語なり地理歴史なりは、これに由って同時に生徒を日本の好き青年たらしめ、さらになお将来の「好き日本人」たらしむるために、とくに設けられている科目である。諸君を日本の国土と繋ぐ紅の紐である。[9]
>
> （傍線論者。以下同じ）

ここに登場する「紅の紐」は、おそらく赤い糸を下敷きにしたもので、元来の男女間の関係を表す用法が拡張され、単に宿命的な関係を表す語として用いられていると見てよいだろう。

次に挙げるのは、太宰治が短編小説「思ひ出」（一九三三年四～六月発表、『晩年』所収）に記した用例である。用例と言うよりも、まさに赤い糸の伝説そのものと称してさしつかえあるまい。

> 秋のはじめの或る月のない夜に、私たちは港の桟橋に出て、海峡を渡ってくるいい風にはたはたと吹かれながら赤い糸について話し合った。それはいつか学校の国語の教師が授業中に生徒へ語って聞かせたことであって、私たちの右足の小指に眼に見えぬ赤い糸が結ばれていて、それがするすると長く伸びて一方の端がきっと或る女の子のおなじ足指にむすびつけられているのである。ふたりがどんなに離れていてもその糸は切れない、どんなに近づいても、たとひ往来で逢っても、その糸はこんぐらかることがない。そうして私たちはその女の子を嫁にもらうことにきまっているのである。私はこの話をはじめて聞いたときには、かなり興奮して、うちへ帰ってからもすぐ弟に物語ってやったほどであった。[10]

ほぼ十年後、太宰は右の字句を含む一節を、小説『津軽』（一九四四年十一月）にもそのまま引用している。[11] ここに記された赤い糸の伝説は「学校の国語の教師が授業中に生徒へ語って聞かせた」という設定になっているが、人気作家として一世を風靡した太宰がその作中に二度までも書き付けたことによって、赤い糸の伝説が日本において一般化する素地が用意されたのかもしれない。

ところで、現今の大学生などには、何とはなしにこの伝説が日本固有のものであると信じている向きも少なくないようだが、実は然らず。ここで次の英文をご覧いただきたい。

> (allu.) an invisible thread, tied by a spirit in heaven, to bind boy and girl together as man and wife.

NII-Electronic Library Service

Meisei University

ざっと訳せば、「〔引喩〕精霊によって結ばれた目に見えない糸。男女を夫婦として結び付ける」となろうか。にわかにこれを見れば、日本の赤い糸の伝説に関する簡略な記述のごとくであるが、何を隠そう、右の英文は、林語堂『当代漢英詞典』の〈紅線〉の項の記述なのである。

となれば、日本の赤い糸は中国の〈紅線〉と共通の伝説、おそらくは例に漏れず、中国渡りの伝説ではないかと推測されるだろう。これを簡略に跡づけてみようというのが本稿の趣旨である。

赤い糸の原型

まず、中国の赤い糸の伝説の原型を探ってみることにしよう。現在、調査しているかぎりでは、李復言『続玄怪録』（一名『続幽怪録』）巻四に見える「定婚店」故事（『太平広記』巻一五九所収）が初出のようである。原文は少々長いので、梗概を示すことにしよう。月下老人の名でも親しまれている物語である。

元和二年（八〇七）、韋固という青年が、意に反してなかなか結婚できずに悩んでいたところ、ある早朝、月あかりの中で奇妙な文字を記した書物を読んでいる老人に出会った。聞けば、それは冥界の書で、自分は婚姻の事を司ると言う。そこで、韋固が結婚できぬ悩みを訴えると、老人は「今、おまえの妻は三歳。十七歳でおまえに嫁ぐことになっている」と告げた。また、傍らにある袋の中身をたずねると、赤い縄が入っており、それで夫婦となるべき男女の足を結べば、たとい家どうしが仇敵の間柄でも、必ず結婚する運命になると言う。韋固が自分の結婚相手を知りたがると、老人は韋固を市場に連れてゆき、目の悪い野菜売り女が抱いているみすぼらしい三歳の女の子を指さして、それが韋固の将来の妻であると言った。あまりの事に、韋固は下僕に命じて、翌日その女の子を刺させたが、短剣は急所をはずれ、眉間を傷つけただけだった。十四年後、韋固はようやく妻を娶ったが、いつも眉間に飾り物を付けていた。韋固がそのわけをたずねると、三歳のとき凶漢に襲われた傷跡が残っているのだと言う。果たして、老人の言った通り、韋固の妻は、かつて目の悪い野菜売りの女が抱いていた女の子だったのである。

『大平広記』のテクストでは、冒頭の年号が「貞観二年」（六二八）となっているが、いずれにしても唐代の故事として設定されていることに変わりはない。右の梗概中に見える「赤い縄」が赤い糸の初出であり、原文は〈赤縄子〉。結ぶ部位が明確に足と決まっているほかは、今日の日本人が理解している赤い糸と似たようなものであると言ってよいだろう。按ずるに、先に掲げた柳田国男の「紅の紐」は、この〈赤縄子〉の変形なのではなかろうか。また、太宰治が作品中に記した赤い糸の伝説は、明らかにこの故事の節録であろう。赤い糸の結ばれる部位が「右足の小指」と細かく限定されてはいるが。

唐代の書物については、今のところ右の「定婚店」の説話しか見つかっていない。が、次の五代十国時代になると、端的に赤い糸を表す〈紅絲線〉の三文字が登場する話を載せる書物が現われる。王仁裕『開元天宝遺事』巻上に載せられている「牽紅絲娶婦」、すなわち成語「紅絲待選」の出典として知られる故事である。全文で一二八字の短篇ゆえ、左に全訳を掲げておく。

NII-Electronic Library Service

Meisei University

郭元振は、若いころ、美貌と才能に恵まれた好男子であった。宰相の張嘉貞はぜひ元振を自分の娘の婿に迎えたいと思った。ところが元振は、「あなたさまの家にお嬢さんが五人いらっしゃることは承知していますが、五人のうちどのお嬢さんがいささか容色が劣るのかわかりません。この一件は急いで決めるのもどうかと思われますので、さらに時間をかけて考えさせていただきたく存じます」と答えた。すると張嘉貞は一計を案じ、こう提案した。

「わたしの娘はそれぞれ美貌の持ち主だが、どの娘が貴君の結婚相手にふさわしいかはわからない。貴君はすぐれた品格の持ち主で、平凡な青年とはわけが違うからね。そこで、わたしは五人の娘に幔の向こう側でそれぞれ一本の赤い糸を持たせ、貴君にそのうちの一本を引いてもらい、引き当てた娘の婿になってもらいたいと思うのだが、どうだろうか。」元振は喜んで張嘉貞の言う通りにした。その結果、元振は三番目の娘を引き当てた。娘はすぐれた美貌の持ち主であった。その後、張嘉貞の見込んだ通り、元振は出世し、嫁いだ娘も尊い身分になったのである。

ここに見える「赤い糸」の原文は〈紅絲線〉。やはり男女を結ぶ象徴として登場しているありさまが看て取れよう。

時代の前後関係から見て、この「紅絲待選」故事は先の「定婚店」故事を下敷きにしているのではないかと推されるが、両者のあいだの関連を強く示唆する共通点はなさそうである。第一に、いずれも赤い糸が男女を結びつけている点では共通しているが、「定婚店」は〈赤縄子〉、「紅絲待選」は〈紅絲線〉と、字句に明確なずれがある。第二に、赤い糸の結ばれる部位も、前者が足であるのに対し、後者では手に持つ設定になっている。第三に、結ぶ時点を検してみると、「定婚店」の方は、原文に「及其生則潜用相繋」とあり、出生にさいして時を措かずに結ばれるものとしているが、「紅絲待選」の方では、結婚相手を選ぶ時点で赤い糸がようやく現われるにすぎない。第四に、赤い糸を結ぶ者であるが、「定婚店」には冥界の人、すなわち人間を超越した一種の神とも言うべき月下老人が登場するが、「紅絲待選」にそのような志怪的要素はまったく見えず、あくまでも現実の人間界のみでの話になっている。第五に、結婚する相手の女性について考えてみても、「定婚店」では一〇〇％の確率で相手が絶対に定められているのに対し、「紅絲待選」では、五人の中からたまたま一人を、つまり五分の一の確率で選ぶことになっている。換言すれば、前者では、人為を超えた必然的な運命によって結婚するのに対して、後者では、人為による偶然的な選択によって結婚に至るというわけである。

結局、以上のような相違により、「紅絲待選」が先の「定婚店」を下敷きにしているのかどうかは明確でない。この二話はまったく別個に成立したものだったのだろうか。もっとも、両者とも前世の観念とは無縁であることには注意しておきたいと思う。赤い糸の結ばれる時点が出生にさいしてであるにせよ、結婚相手を選ぶその場であるにせよ、いずれも現世での話であり、少なくともこれら二つの話の字句を見るかぎり、赤い糸が前世で結ばれているとする仏教的な色彩を認めることはできないのである。[12]

ただし、二つの故事の関連いかんにかかわらず、「定婚店」あるいは「紅絲待選」によって、赤い糸が男女を結び付ける象徴としての地位を固めたことは確かなようである。実際、宋代以降、〈赤縄子〉と

NII-Electronic Library Service

Meisei University

〈紅絲線〉の派生語が赤い糸を表す語として並立し、いわゆる赤い糸として中国文学作品中に散見することになる。

赤い糸の用例

以下、宋代以後の用例を時代を逐いつつ列挙し、「定婚店」の〈赤縄子〉と「紅絲待選」の〈紅絲線〉がどのような形で現われるかを見てみることにしよう。ただし、これらの用例は系統的に収集したものではない。いわば任意に拾った用例の寄せ集めの、そのまた抜粋である。論議も当面の仮説にすぎぬゆえ、そのつもりでご覧いただきたい。

有赤縄繋足、従来相門、自然媒妁。

（宋　張元幹『蘆川詞』〔瑞鶴仙〕寿）

これは、文字通り月下老人の〈赤縄〉である。

既然你肯把赤縄来繋足、久以後何須流水泛桃花。

（元　喬吉『揚州夢』第三折〔採茶歌〕）

まったく同様の用例。ところが、興味深いことに、同じ『揚州夢』第三折の末尾に次のような七言の詩が登場するのである。

俊雅長安美少年、風流一対好姻縁。還須月老牽紅線、纔得鸞膠続断絃。

月下老人が〈紅線〉を牽く――すなわち、ここでは〈赤縄〉が〈紅線〉に変わってしまっている。平仄上の制約から当該位置に〈赤縄〉を用いることができなかったための御都合主義であろうが、ここにおいて、〈赤縄子〉であったはずの「定婚店」故事に「紅絲待選」故事の〈紅絲線〉が入り込み、語句の上で混同されるに至ったわけである。

紅楼此日、紅絲待選、須教紅葉伝情。

（元末明初　高明『琵琶記』牛相奉旨招婿〔似娘児〕）

この例では〈紅絲線〉が〈紅絲〉の形で現われている。先の『蘆川詞』の〈赤縄〉や『揚州夢』の〈紅線〉と合わせ見れば、〈赤縄子〉にせよ〈紅絲線〉にせよ、いかにも中国語らしく、二字につづめられる傾向の強いことが明らかだろう。

明代にも二字から成るこれらの三語が引き続き用いられてゆく。詞、套数、戯曲から一例づつ挙げておこう。

当初黄巷相逢、後来紅線相従、此去白頭相守、榴花無限薫風。

（明　韓奕『韓山人詞』〔清平楽〕寿内）

紅絲繋足、誰把并刀双揽。

（明　陳鐸　仙呂入双調「冬暮題情」〔錦衣香〕[13]）

赤縄繋足、朱楼合巹、不須白雪窺臣。

（明　汪錡『春蕉記』賜婚〔似娘児〕）

NII-Electronic Library Service

Meisei University

陳鐸の〔錦衣香〕を見れば、〈紅絲〉も〈紅縄〉の同意語として使われることがわかるだろう。もっとも、明代には〈紅線〉と〈赤縄〉に区別を設ける、次のような面白い例も登場する。

若論到夫婦、雖説是紅線纏腰、赤縄繋足、到底是剜肉粘膚、可離可合。　（明　馮夢龍『警世通言』巻二「莊子休鼓盆成大道」）

〈紅線〉と〈赤縄〉の両者を一処に並べ、〈紅線〉は腰にまとわり、〈赤縄〉は足をつなぐと、それぞれに一種の役割分担を設けている。〈赤縄〉が足をつなぐのは「定婚店」の話そのままとしても、〈紅線〉が腰にまとわりつくのは、どこにも見られなかった設定である。ちなみに、厳敦易はこれに注して、「〈纏腰〉の二字を用いたのは、後ろの〈繋足〉と対句を成すためである」と言っている。[14] なるほど、平仄をみれば、「赤縄繋足」（仄平仄仄）と対句にするためには、「紅線」（平仄）の次に平声字を二つ並べなければならない。しかし、「纏」（平）は「繋」の類義語であるから選ぶのに問題ないとしても、ことさら「腰」（平）を選んだ理由は何なのだろうか。確かに、常識的に考えて赤い糸を結ぶのが可能と思われる身体の部位を表わす言葉は、頸・臂・腕・手・指・膝・腿・脚・踝など、仄声字ばかりで、平声字は腰ぐらいである。となれば、平仄の要請上、「腰」とするのも已むを得まい。ただし、「腰」が無理であれば、他にも処理の仕方があったように思うのだが、どうだろうか。もしかすると、当時の婚礼の習俗（赤い帯で新郎新婦の腰を結ぶなど）と関係があるかもしれない。暫くここに記して後日の調査を期すこととしよう。

明代には、〈赤縄〉〈紅線〉〈紅絲〉以外の語も現われる。

正是：不須玉杵千金聘、已許紅縄両足纏。　（明　馮夢龍『醒世恒言』巻七「錢秀才錯占鳳凰儔」）

ここも一種の詩句で、対句風に仕立てたい箇所のため、使える字には制約がある。〈赤縄〉（仄平）では、「縄」が孤平になり、「紅線」（平仄）では、「紅」が孤平になる上、前後の七言句の第四字「杵」「線」が均しく仄声字になってしまうので、拙劣の誘りを受けよう。平仄から言えば、「玉杵」（仄仄）に対して、〈紅絲〉（平平）で十分なところ。もっとも、後ろに「両足纏」とあるので、できれば「定婚店」故事に基づいて〈赤縄〉を用いたい心情が働いたからであろうか、「赤」（仄）を「紅」（平）に換えて、〈紅縄〉としている。このあたり、いかにも中国語らしい処理の仕方だろう。ちなみに、同巻の右の字句に先立つ部分に「紅絲豈是有心牽」の詩句が見られるので、〈紅絲〉の語が存在するのを承知した上での措置であることは確かである。

なお、この明代には、「定婚店」すなわち月下老人にまつわる話を素材とした戯曲も書かれたらしい。莊一拂『古典戯曲存目彙考』によれば、次のような作者とその戯曲名が伝わっている。

劉兌『月下老定世間配偶』雑劇

劉兌、字は東生、浙江・紹興の出身で、明初の洪武年間（一三六八～一三九八）前後に在世した人物であるという。ただし、戯曲本文がすべて残っているわけではなく、今日では、四套（仙呂・正宮・黄鍾・

NII-Electronic Library Service

Meisei University

双調）が存しているにすぎない。その字句は『詞林摘艶』『雍熙楽府』などに残っており、趙景深『元人雑劇鉤沈』で全曲を簡便に目にすることができる。もっとも、趙景深の考証によれば、実は雑劇ではなく、もともと套数であったものが、後に雑劇と見なされるようになったのではないかとのことである。[15] 四套は、『雍熙楽府』がそれぞれ「春景」「夏景」「秋景」「冬景」と題している通り、四季の情景を歌っているが、紙幅の都合上、具体的な字句の紹介は省略に従う。管見によるかぎり、特に赤い糸に関する注目すべき字句はない。

一方、「紅絲待選」故事の中心人物郭元振を主人公とした戯曲もあったようで、やはり荘一拂『古典戯曲存目彙考』によれば、許三階『紅絲記』、彭南溟『四義記』、闕名氏『古剣記』（前二者は明代伝奇、後一者は明清闕名作品）などがあったらしい。ただし、これらはいずれも失われ、題名以外は何も伝わっていない。

ともあれ、先に掲げた用例の多彩なありさま、および戯曲の製作状況などから推して、中国における赤い糸はおおよそ明代を以て広く定着したと言ってよいのではないかと思われる。

清代の用例は、一つ掲げるだけにとどめよう。

管姻緣的有一位月下老人、預先注定、暗裏只用一根紅絲把這両個人的脚絆住、……若月下老人不用紅線拴的、再不能到一処。

（清　曹霑『紅楼夢』第五七回）

月下老人が登場し、その結ぶ物は〈紅絲〉とも〈紅線〉とも記されている。元代に見られた、「定婚店」故事と「紅絲待選」故事における赤い糸の用語上の混同がこの清代を代表する長編小説にも受け継がれているわけである。

なお、孫楷第『中国通俗小説書目』巻四「明清小説部乙・烟粉第一」に、〔清〕無名氏『賽紅絲小説』十六回が見え、『中国通俗小説総目提要』所載の梗概によれば、〈紅絲〉が当該小説中で重要な役割を果たしていることが知られる。[16] これも、赤い糸が広く普及していた事実を物語る証左の一たるを失うまい。

以上はすべて古典作品からの用例であるが、現代中国語においても用例を作ることは可能であるらしく、大型の成語辞典『中華成語辞典』（吉林文史出版社、一九八六）は「赤繩繫足」を立項し、「定婚店」故事を出典としたうえで、次のような現代中国語の一文を載せている。

這一対青年是甚麼時候「赤繩繫足」的、説也説不清、不過很久以来他們就已経互相傾心了。

（この男女のカップルがいつ赤い糸で結ばれたのか、はっきりとは言えないが、もうずいぶん前から互いに夢中になっていた）

むすび

ここまで見てきたように、赤い糸の伝説は中国唐代に起源を持ち、五代十国時代にもう一つ別種の原型が登場、その後、時代を逐って二種の原型が並行・融合しつつ命脈を保ち、現在にまで至っている。

また、日本には遅くとも大正時代の末、一九二〇年代には移入され、中国における伝説の原型たる「定婚店」故事が太宰治の小説に節録されるに至った。その後、いつのころからは明確でないが、日本で

NII-Electronic Library Service

Meisei University

は赤い糸の結ばれる部位を手の小指（左右のいずれかは定かでない）とする説が発生し、今日に至っている。おそらく、足を結ぶのでは慕い合う男女の結びつきの象徴としていささか品位に欠けるとする感性、また、手の小指を突き立てて恋人あるいは情婦の意を表す慣習の存在などが、その日本における変容に与って力を発揮したものと推測されよう。[17]

なお、赤い糸の原型「定婚店」故事が生まれた唐代には、赤い色を媒介として男女が結びつく例が他の話にも見られることを付け加えておきたい。

一つめは、いわゆる唐代伝奇の一たる元稹『鶯鶯伝』である。つとに知られているごとく、この物語には、紅娘という小間使いが登場して、張生と鶯鶯の逢瀬の取り持ち役をつとめている。人名とはいえ、紅娘の「紅」が赤い色を連想させることは言を俟たない。ちなみに、後代、『鶯鶯伝』に基づく戯曲（例えば〔金〕『董解元西廂記』諸宮調・〔元〕王実甫『西廂記』雑劇など）が製作されて広く流布した結果、紅娘は媒酌人の女性の代名詞ともなった。

二つめは、「紅葉良媒」または「御溝紅葉」などの成語で知られる故事である。范攄『雲溪友議』巻下「題紅怨」の後半（『太平広記』巻一九八所収）に見え、紅葉に詩を書き付けて禁中の堀に流した宮女と、その紅葉を拾った盧渥という男が結ばれたというもの。この話は宋代になって孫光憲『北夢瑣言』巻九（『太平広記』巻三五四所収）や劉斧『青瑣高議』「流紅記」などに形を変えて再録され、先に記した高明『琵琶記』の用例中にある「紅葉伝情」の語もこの故事を踏まえる。

按ずるに、「定婚店」故事は、唐代に盛んになった、赤い色によって男女が結びつくこの種の話群の一角を占めるものなのではないだろうか。

一方、色彩こそ赤と指定されてはいないものの、細い紐（「細縄」）によって結婚する男女の脚を結ぶ（「絆男女脚」）話も『太平広記』巻三二八「閻庚」に見える。

今後は、以上の類話に目を配りつつ、「縁」の観念との関連、赤い色をめでたい色彩として重んずる婚礼習俗との関係[18]などをも考察の対象に含め、さらに赤い糸の伝説について考究を続けていきたい。

（言語文化学科　講師　日中比較文学）

【注】

(1) 「プチセブン」一九九一年四月一五日号、四一頁
(2) 「バッカス」一九九一年九月号、八一頁
(3) 「GORO」一九九一年十月二四日号、八一頁
(4) 「プチセブン」一九九二年一月一五日号、一〇五頁
(5) 「ポポロ」一九九二年九月号、一一一頁
(6) 津雲むつみ『赤い糸の伝説』一九九〇年七月、SGコミックス、集英社
(7) キューティー鈴木&尾崎魔弓写真集、サン出版、一九九二年九月
(8) 月刊『宝石』一九九二年十一月号、九六頁
(9) 柳田国男『青年と学問』六九頁、岩波文庫、一九七六年三月
(10) 太宰治『晩年』五三―五四頁、新潮文庫、一九四七年十二月
(11) 太宰治『津軽』一四頁、新潮文庫、一九五一年八月
(12) 『毎日一辞』第三輯（華視出版社、一九八三年、台北）一五一頁によれば、後代、杭州の西湖に「月下老人祠」が建てられ、その門に左のような対聯が貼られたという。
　願天下有情人　都成為眷屬
　是前生註定事　莫錯過姻緣
「前生」の二文字は、明らかに月下老人の赤い糸を前世の観念と結びつけるものである。但し、これに関しては年代その他が未詳のため、以下、本論文中では前世の観念との関連について言及を避けておく。
(13) 鄭騫『曲選』（中国文化大学出版部、一九八一、台北）巻五「南曲（下）」二四一頁
(14) 『警世通言』（上）（人民文学出版社、一九八七、北京）一三頁　注②「這裏用〈纏腰〉二字、是特為和下句〈赤繩繫足〉的〈繫足〉対偶的」

NII-Electronic Library Service

Meisei University

(15) 趙景深『元人雑劇鈎沈』(上海古典文学出版社、一九五六、上海) 一二七頁「可能原作為套数体裁。嗣後即視為雑劇矣」

(16) 江蘇省社会科学院明清小説研究中心文学研究所『中国通俗小説総目提要』(中国文聯出版公司、一九九〇年、北京) 三九六頁

(17) これに対し、中国で赤い糸を結ぶ部位がほぼ一貫して足とされてきた理由として、①「定婚店」故事が流布し、結ぶ部位として足が強く意識されたこと、②逃れたい運命を表すのに、足どうしを結ばれたイメージが好都合であったこと、③宋代以降、次第に纏足が普及し、女性の結婚の条件とされてゆくにつれて、結婚と足との連想が強まったこと、などが指摘できよう。なお、日本の古典文学作品などにおいて赤い糸が登場する例は、今のところ未見である。もし用例があれば御教示いただきたい。

(18) 『中国象徴辞典』(天津教育出版社、一九九一、天津) の「紅線」の項の記載によれば、一部の漢民族と蒙古族に、結婚式の席で新郎新婦の指を赤い糸で結ぶ風習が見られ、結ぶ部位は、男が右手の中指、女が左手の中指であるという。手の小指に結ばれる日本式の赤い糸に通ずるものがあり、甚だ興味深い習俗である。

*本稿中、中国の文献の簡体字・繁体字については、適宜字体を改めた。寛恕を請う。

NII-Electronic Library Service